

昭和学園における谷騰の教育実践（Ⅲ） — 労作教育と文集『こまどり』の中の子ども —

木 全 清 博

Tani Noboru's Educational Practice in Showa Gakuen (Ⅲ)

— Children' Study and Action in “Komadori” —

Kiyohiro KIMATA

ま え が き

滋賀県における大正新教育運動について、谷騰の昭和学園の教育実践に注目してきた。昭和学園は、1927（昭和2）年2月の設立から1938（昭和13）年までの彼の死による閉校の短い期間しか存在しなかった。とはいえ、谷騰の昭和学園での教育は、子どもの個性を尊重し、子どもの創造性と自発性を伸ばす教育活動を推し進めるものであり、この時期の滋賀県下ではきわめてユニークな教育実践であった。

「昭和学園における谷騰の教育実践（Ⅰ）」で、近江八幡市土田での私立小学校昭和学園について創設の経緯や学園をとりまく教育環境の概観を明らかにした。谷騰が展開した昭和学園の教育実践の源流がどこにあり、どのような教育実践をもとにしていたかについて、1921（大正10）年から1926（大正15）年までの東京の成城小学校の教育と成城小での理科教育実践を考察した。沢柳政太郎創立の成城小学校の学校理念や教員集団の研究精神、独創的な教育課程、低学年理科の導入と実験重視の科学教育など、彼は成城教育から多くのものを学びとっていたことが明らかとなった¹⁾。

「昭和学園における谷騰の教育実践（Ⅱ）」で、成城小学校在職末年の谷に衝撃を与えたのは、ヘレン・パーカーのドルトン・プランであ

り、昭和学園では成城小で学んだドルトン・プランの実践をある意味では忠実に実施したことを跡づけた。昭和学園の子どもの学習スタイルや教科の学習内容、定例集会での教師と子どもの約束などを紹介し、パーカーのアメリカのドルトン町の実験学校の教育実践を比較した²⁾。

彼女の構想し、指導したドルトン・プランは最初、障害児学校の子どもの実態に合わせて行われたものであり、しだいに健常児の学校の少人数サイズの学級へと拡大適用されていった。パーカーの実験室案では、子どもによる学習進度の申し出と学習計画作りを重視し、教師が全体の子どもの学習計画を把握するために、3種類の学習進度表を作成していた。谷の昭和学園においては子どもによる学習計画を実践記録から裏づけることができたが、進度表を含む学校記録の資料類は残されていなかったのか、現在まで発見されていない。

以上のように、谷騰の昭和学園の教育実践の源流として、1つは大正新教育運動のメッカともいべき成城小学校の学校論と教師論から学びとり、2つは教育実践の展開ではパーカーのドルトン・プランの実験室案をかなり忠実に取りいれようとしたことの2点を確認することができた。本稿では、昭和学園の理念を谷騰の残した言葉からあらためて見直すことから始めて、教育実践の姿を子どもの自主的な活動の

成果が報告されている文集『こまどり』の内容を分析していく。昭和学園の子どもの成長・発達の姿がどのように現れているかを文集『こまどり』の中で見ていきたい。

『こまどり』は、谷が子どもたちに企画・編集させたもので、1928（昭和3）年1月創刊の謄写版刷りの学校文集である。1929（昭和4）年度に発行された第15号から第18号までの4冊を、中村（旧姓池野）君子氏よりお貸しいただいて複写したが、他の号の所在は確認できていない。ここでは、4冊の文集『こまどり』の現物を中心にして、谷自身による実践記録中の引用や掲載されている『こまどり』の各号を復元しながら、子どもの創造的な活動の展開された昭和学園の実践構造に迫ってみたい。

1 谷の教育理想 — 昭和学園の教育綱領

（1）谷の成城小学校退職の理由

谷騰は、成城小学校を1926（大正15）年3月に退職して、故郷の滋賀県に戻った。谷自身が成城小学校を辞めて帰省した理由や5年間の成城小時代の回顧を記した文章が発見されていないので、東京を去るに至った真の理由はわからない。しかし、彼が成城小を去っていくにあたり、送別の辞を書いた成城の同僚濱野重郎の文章から、谷が成城小に見切りをつけた理由を推測することができる。

濱野は、『教育問題研究』第74号 1926（大正15）年5月の「成城だより」において、成城学園の学校がこの時期に大きく揺れ動いていたことを率直に書いている。前年1925（大正14）年3月末に、中学と小学の一部分が玉川に引っ越したこと、職員の人数も半分になって、牛込の方がかなり淋しくなってきたこと、主事の小原国芳も高等学校建設やその他で忙しく、一週間に一日しか学校に顔を見せなくなっていたこと、4月から幹部3人を選挙で選んで学校運営の事務を分掌してもらったことなど、である。それまでの成城小学校の築きあげてきたものが、大きく変質し始めてきたのである。

上の背景を整理すると、1922（大正11）年に成城小学校の第1回卒業生を収容する成城第二中学校が設置されていた。1925（大正14）

年に同校を東京の西郊の砧に移転させるとともに、牛込にある成城小学校とは別の成城玉川小学校をこの年に同地で開設した。翌1926（大正15）年には七年制高等学校を発足させ、成城学園は一大学園として拡大発展していく。主事小原国芳は実質的な学校運営と経営の中心であったので、中学校や高等学校の創設の問題やその性格をめぐる論議で東奔西走しており、他に機関誌『全人』の発行問題で教員集団での論争が発生して、成城小学校の教員が一枚岩でなくなりつつあった。

谷騰は、成城小学校の大正新教育の実験学校としての魅力に惹かれ、主事小原を頼って滋賀県から成城小学校に行くことを希望し、それが実現して、小原の強力な指導のもとにあった成城小学校のすぐれた教師たちに出会うことができた。教育研究に打ち込む成城小学校では、教師集団は切磋琢磨してすぐれた教育実践を積み重ね、全員が教育実践の研究論文を機関誌『教育問題研究』に書いた。谷は1921（大正10）年から5年間、29歳から34歳までこの学校で理科の教師として刺激豊かな生活を送った。

濱野重郎は、谷を送る文章を次のように書いている。やや長いが引用する。

「五年の間（特に私立学校の五年は可なり長く感ぜられる）生命がけて働いてゐた谷君は愈々成城を去って、故郷近江に帰った。そしてあの太湖の辺りに寺子屋を建てることになった。奥さんと二人で。

これだけの事実でも、谷君の信仰、理想或は思想が察せられるであろう。多くを語らない谷君に対して多弁を弄する事は彼の高潔な人格をきづける事になり、すまないと思ふから多くを言はぬ。しかし一言を許せ。

気味の悪い程冴えた頭、太つ腹、そしてこんな嘘の無い気取った処の無い、わざとらしい処や誇張した処の無い、美しい男を私は見た事がない。

嘘の多いこの都会にはこれ以上君は住む事の出来ないのだ。君のその美しさが自然讃仰の声となり、自己至上の教育となり土臭さの教育となり、田園も亦君を再び琵琶湖畔に取り戻したのだ。

君はペンを持って紙に書きしるす代りに、
警句を以て吾等の脳裏に刻みつけて呉れたの
だ。僕は君を理科の先生だとばかり思ってゐ
た。そして筆無精な男だと思ってゐた。しか
し土臭杵兵衛が残した『去るの日』の一文は
あれは堂々たる詩ではないか。君はまさに詩
人だ。そしてあれは大論文ではないか。僕は、
僕の魂が都会病に罹り教育良心が鈍らうとす
る時にあれを取出して口誦まふ。君の手に育
まれる、七八人の子供は最も幸福な者だ。今
私は、君と君の細君と、そして集まった子供
達の上に栄光あれと祈って筆を擱く。」

濱野の谷への送別の辞は、最大級の讃辞で飾
られている。ここには、故郷に帰った後に、七
八人の子どもを引き受けて、寺子屋的な教育を
行う事を書いており、昭和学園の設立を予想さ
せる。谷騰の成城を去る理由の一端は、抽象的
な書きぶりではあるが、わずかながら書かれて
いる。その理由は、成城小学校での教育の理想
に見切りをつけたことである。東京で教育の理
想が破れて、故郷でその理想を実現しようとし
るために帰省するというのである。彼の理想と
する教育の実現とは、どんな学校で行うことが
できるか。嘘の多い都会ではできないと批判し
て、都会病にならずに教育良心が発揮できるよ
うな教育、寺子屋風の七八人ぐらいの子どもを
じっくりと育てる教育、それは自己至上の教育
であり、田園で行う土臭さの教育である、とい
うものであった。それにしても、谷自信の文章
が無いのが残念である。谷がこの時に書いた成
城との訣別の一文「去るの日」が見つければ、
東京の成城小学校という場での大正新教育の限
界が鋭く批判されていたと思われる。

（２） 昭和学園の10カ条の教育綱領 — 1927 年 制定

谷騰は、1927（昭和2）年2月に昭和学園の
教育綱領を定めた。開校に先立つ1ヶ月前で、
滋賀県に私立小学校を認可申請する同時期であ
る。教育綱領の資料は、「昭和学園の教育概観」
『近江教育』第458号 1934（昭和9）年1月
号の中に掲載され³⁾、また同名タイトルで『教
育日本』第79号 1937（昭和12）年にも掲載

されているものである⁴⁾。ここではまず最初に、
教育綱領の10カ条の項目をあげてみよう。

- 1 魂を磨き上げる教育
- 2 元気旺盛なる身体教育
- 3 個性尊重の教育
- 4 自然と親しむ教育
- 5 科学的訓練を重んずる教育
- 6 創作性を伸ばす芸術教育
- 7 働くことを体験させる教育
- 8 家庭主義の教育
- 9 人道愛を体現する教育
- 10 剛健不撓の意志の教育

昭和学園の教育綱領の第1条から第10条ま
でを見ると、そのうちの数カ条は成城小学校の
教育理念を継承していることがわかる。成城小
学校の教育理念は、沢柳の意図した「私立成城
小学校創設趣旨」に書かれたもので、「希望理
想」の4カ条があげられた。成城小学校は、
1917（大正6）年4月に創立されているが、教
育問題研究会を設立して全国の会員を募集して、
機関誌『教育問題研究』を1920（大正9）年
4月に創刊した。創刊号に主事鰐坂（後に改姓
して小原）国芳の名前で、成城小学校の理念を
説明する「成城から」の小論が掲げられている。
鰐坂国芳は、以下では小原国芳に統一する。成
城教育の希望理想4カ条とは、次のようである。

- 1 個性尊重の教育 附、能率の高き教育
- 2 自然と親しむ教育 附、剛健不撓の意志
の教育
- 3 心情の教育 附、鑑賞の教育
- 4 科学研究を基とする教育

ここで、成城教育の理念と昭和学園の教育綱
領を比べてみると、成城の第1条と昭和学園の
第3条が、成城の第2条と昭和学園の第4条お
よび第10条が、成城の4条と昭和学園の第5
条が、ほとんど条文も一致して説明も同じであ
る。成城の第3条のみが直接的に同じ条文はな
い。

しかしながら、成城の第3条心情の教育は、
内容説明において「愛の一念を基礎とする教
育」「幼き時に愛せられなかった子供は人を愛
することは出来ない」「学校をして……親密甘

美なる一大家庭のやうにしたい」とされていることから、昭和学園の第8条に相当するものである。また、「芸術教育、即ち美育に至りては、我国は余程閑却してる。」「真善美聖の文化生活が真の吾人の人生生活でなければならぬ。」から、手工・図画・唱歌など「真に美そのものを味ふことができる子供を作りたい」と言う。昭和学園の第6条の内容を含むものである。

このように、谷騰は昭和学園開設にあたって、小学校の学校理念として成城小学校から中核となるものを継承したのである。昭和学園の教育理念の独自性は、成城には掲げられなかった昭和学園の条文中にあると言わねばならない。残された条文を検討してみよう。

第1条 魂を磨き上げる教育

谷の説明では、教育において「人間として最も尊敬すべき魂を磨き上げる事を^{おろそ}かにして、小智小才の利く軽薄者流を濫造する弊が甚だしいのは浩歎すべき極である。本学園では先づ教育の目標を人格の養成に置き、はらの据つた真個の人間、美しい魂の輝き渡る真実の日本人を作り上げることを中心生命とする。」としている。人格の全体の発展、発達を学園の教育目標におき、腹の据わった真個の人間を作ろうとした。

第2条 元気旺盛なる身体教育

この説明には特につけ加えることもないが、谷が綱領の前段に身体を鍛えることをあげた理由は、開校・設立前から病弱な子どもや聾啞児童など身体的なハンディキャップのある児童が入学を予定されていたからであろう。実際に、公立小学校に入れなかったり、入ってもうまく学校生活の適応できない子どもを預かって、積極的に入学させていった。彼の説明では、「児童に於ては、遊戯は彼等の作業であり、心身鍛練の機会であり、且つ将来生活の準備でもある。」と述べ、昭和学園では「遠足、旅行、登山はその目的の一半を元気旺盛なる身体にかけている。」として、校外での活動に大きな位置を与えた。

第6条 創作性を伸ばす芸術教育

先に述べたように、芸術教育について成城教育の理念の第3条に含めて説明していたが、芸術教育を創作性を伸ばすという点で強調したの

は新しい観点といえよう。

第7条 働くことを体験させる教育

昭和学園の教育綱領の第7条は、人間は働くことに価値をおき、労働によって自己を実現して、自己を発達させるという思想と、万人の労働によってよりよい世の中を作るという考えであった。労働価値説を踏まえたこの把握は、成城教育の理念には全くなかった思想である。大都市東京の新教育運動の理念にならなかった考えであり、一地方の農村の私立小学校でこそ初めて新教育運動の理念にすえられた考えであった。

谷の説明を引用してみる。「本質的に言へば、パンの為に労働するのではない。神の存在を知る為に労働するのである。人間の中に内在する神性を発現せしめる完全なる形式として労働するのである。実に労働は人間を自然にかへし、自然は人間を神に近接せしめる。現行不一致の議論家の多い現代社会に於て、殊に図書と言葉に依って教育する傾向の盛んなる時に於て、本学園が労作、作業、生産を人間教育の中心課題として、諸種の具体的施設をなせるは、実に働く人、汗によって魂を磨く人を作らんとするがためである。」

このように当時の滋賀県下でも流行しつつあった「労作教育、作業教育、生産教育」を積極的に昭和学園の教育内容に取り入れようとした。問題はこの取り入れ方であり、単なる労作、作業、作業の体験至上主義の学習に陥るか、知的探求心の教育と結びつけて全人的な発達の教育に発展させられるかは、大きな別れ道であった。谷は、成城小学校の基本理念である科学的精神に基づいて、労作教育を構築しようとした。展開された教育実践において、彼の労作教育、勤労教育が科学的探求心を重視したものであることを立証することができる。

第9条 人道愛を体現する教育

谷による万人労働の思想も、この人道愛の教育の説明も、トルストイの思想からの影響でもあるが、「汝自身を愛せよ。汝の隣人を愛せよ。かくて凡ての人を愛せよ」の人道主義の標語で止まるのでなく、「児童によって実現せらるるのは国際的文化国家でなくてはならぬ。」としている。こうしてヒューマンイズムに基づくイン

ターナショナリズムを基盤に置いた教育の方向を教育理想と考えたのであった。その後に日中戦争の拡大につれて谷の教育思想が、ナショナリズムの方にぶれていく形跡はあったが基本的な姿勢は変質しなかったと思われる。

ところで、谷の昭和学園の教育綱領の変質を指摘したのは、園田千代恵の先行研究である。園田は1934（昭和9）年の『近江教育』誌での説明と1937（昭和12）年の『教育日本』誌での説明の違いをとらえて、10項目のうち3項目の説明が変化しており、1937年段階における昭和学園後期に「日本精神鼓舞の教育」へ傾斜していったとした。その3項目とは、5科学的訓練を重んじる教育、7労働を体験させる教育、9人道愛を体現する教育であった。

昭和戦前期における時代情勢のなかで、たしかに書かれた論文中には、後者の論文で5にかかわって、「日本特有の文化を創造し、能率の高い生活を営むには、この科学的精神を徹底的に鍛錬して、あくまで心理の探究に邁進し、……」「このために生活の安定、国力の充実、人類平和を念願する態度において児童を科学的に研究態度の訓練に導く必要がある」と述べている。また、7にかかわって、「生活を絶対に保証する上からも、人心を改造するためにも、労働による生活体験は教育上まことに重要である。物心一助、霊肉一体の境地は労働体験を外にして到底真に内観することができない。実に奉仕の労働こそはまさしく人間が仏になる最良の自力行である」と表現しており、労働の中で人間的能力を発達させ、人間として人格的な完成をめざさせるという観点が前面から消えて、弱くなっていることは否定できない。

しかし、この綱領の文面だけで、「日本精神鼓舞の教育」へと変質していったとするのは、どうであろうか。昭和学園の教育実践の実態を詳細に検討せずして、昭和学園の教育の変質を論ずることはできない⁵⁾。谷の昭和学園の教育実践は、1934（昭和9）年段階においても1928～29（昭和3～4）年のころの実践しか報告していないのである。

2 昭和学園の子どもによる労作教育

（1） 昭和学園の子どもと学校文集『こまどり』の創刊

1926（大正15）年4月に昭和学園が設立・開設した当初、谷騰と妻、谷の母と子ども3人の谷家6人を含む、支援者実業家西川吉之助の子弟2人、同じく支援者の医者小野元澄・とよ夫妻の子弟3人、その他の児童2名の合計13人で寺子屋風の私塾で出発した。西川吉之助や小野元澄、その他の近江八幡の篤志者から土地と建物を提供を受けて開学し、入学金1円、授業料1カ月1円であった⁶⁾。授業料は東京の成城小学校3円、児童の村小学校8円に比べると、低かった。1927（昭和2）年1月12日に滋賀県から私立小学校として正式認可され、4月からは正式に私学となり、児童は西川家2人、小野家3人、竹田兄弟2人に加えて、地元八幡町の2人の女子児童が昭和学園に加わった。1928（昭和3）年3月の募集要項には、学費は「家庭の事情により授業料の全部又は一部を免除す」とあり、第1学年5名（男女）、第2学年数名（男女）を募集しており、入学は4月であるが、「但し欠員ある時は臨時許すことあり」としている⁷⁾。

開設3年目の1928（昭和3）年になると、児童数は増加して18人となって、単級の私立小学校として充実してきた。1928年度の欠席調べ表が『こまどり』第15号（1929年5月）に掲載されているが、児童数は13人であるが、表中には西川はま子、小野美代子、小野元衛、小野凌、谷滋の5人の名前が書かれていない。西川はま子は西川吉之助の三女であり、西川が聾児はま子のために口話式聾教育法の資料をアメリカから取り寄せ、はま子のために全力を尽くして口話式の普及を行ったことでよく知られている。

谷の近江八幡での昭和学園の開校も、西川の強力な財政的支援により実現した。はま子は、1916（大正5）年1月生まれで、1923（大正12）年まで吉之助や家族の協力で家庭教育を受けたり、その後は家庭教師の三谷芳子や益田米子らの指導を受けていた。西川吉之助は、1926

(大正 15) 年 4 月初めに昭和学園創設を援助して、「谷騰先生が東京から来られたので同氏にお願いして教育して頂いた」「はま子の姉美和子が同年三月京都の第一府立女学校高等科を出て家に居るので、十月初めからは谷先生に勤労、芸術、理科方面の教育のみをお願いして、其他の学科は美和子が担当して、本年三月女学校入学迄継続した。」(『口話式聾教育』第 4 巻第 4 号)⁸⁾。西川はま子は、1928 (昭和 3) 年 3 月まで 3 年間の昭和学園の教育を受けて、4 月から滋賀県八幡高等女学校に入学した。

開設 3 年目にして昭和学園は、私立小学校として児童数も増加して地域に根づき始めた。1928 (昭和 3) 年に谷は、試行錯誤で繰り返した昭和学園の教育を一層充実させるために、子どもたちの自治活動を学校文集としてまとめることを決意した。学校文集の編集、企画、謄写版の印刷など、すべてを子どもの手で行う『こまどり』を発刊することになった。『こまどり』創刊号は 1928 (昭和 3) 年 1 月であり、創刊号の編集主任になったのは、西川はま子であった。創刊号は現在まだ発見されていないが、編集主任はま子の創刊号の冒頭の言葉が、谷の実践論文に転載されている⁹⁾。

「皆さんに

初めて発行することに致しました。本の目的は皆さんの綴方、童謡、童話、自由詩等を出して戴きまして発表することです。写真や版画も入れ度いと思ひます。時々私の作品や先生のお話も出します。本の名を『こまどり』とつけました。別に深い意味はありません。こまどりは無邪気なかわいい鳥ですから、その名をかりました。どうぞよろしくどしどし出してください。」

谷騰は、『こまどり』を子どもの「創作や生活記録を発表するための、この社会に於ける機関雑誌であり、又子供が編輯、装幀、印刷、製本、発行等の仕事を経験する共同労作である」として、童謡号、労作号、遠足号、旅行号などや版画集の附録を子どもの自由にまかせて発行させた。

(2) 『こまどり』にみる労作教育の課題決定

昭和学園の教育は、子どもたちが「朝からは

勉強で、午後は働き」というものであった。午前中は室内で各自の個別学習を主とした教科の学習を行い、午後は室外に出て 1 時から 3 時まで基本的には協同して労働作業を行う労作教育を実践したのである。午前の教科学習では、ドルトン・プランを取り入れて、前の週の土曜日に谷と子どもとが仕事(ジョブ)の内容や範囲を契約し、計画を立てたのである。そして、次の週は自分の学習計画に従い、個別学習を行った。午後の労作学習は、すべて外で行う労働作業ばかりであったわけではなく、室内で芸術的表現や科学的製作、実用的工作なども行ってもよかった。共同仕事で行う園芸(農園での蔬菜作り、花卉栽培など)、動物飼育(鶏、山羊、兎、インコ、ろばなど)、建築(寄宿舎づくり)が、労働学習として実践された。こうして個別学習と協同学習を組み合わせ、教科学習と労働体験を結びつけた学習が展開された。

子どもの手になる学校文集『こまどり』の発行も、共同労作の一つとして位置づけられた。私が入手できた『こまどり』は中村(旧姓池野)君子さんから提供していただいたものである。現物で入手できたのは 1929 (昭和 4) 年 4 月から秋までの、第 15 号から 18 号までであった。彼女は、前年の西川はま子の後を継いで、この 4 号を含む 1929 年度の第 2 代目の編集主任になっている。池野君子は、谷騰と滋賀県師範学校を 1912 (明治 45) 年卒業の同級生池野茂(北堂)の娘であり、妹正子とともに昭和学園に学んでいる。池野茂はこの時期に近江八幡で「江州公論社」を設立して、教育ジャーナリストとなった人物であり、1935 (昭和 10) 年には教育雑誌『教育陣営』を創刊した¹⁰⁾。

谷の実践論文の中に『こまどり』第 14 号の「労作号」からの引用が紹介されている。この号は発行年月日を書いていないが、1929 (昭和 4) 年 4 月号と思われる。労作教育における取り組む課題を決定する協議会の情景を生き生きと描いている。谷と子どもの「仕事の相談会」でのやりとりがよくわかるものなので、やや長いが引用したい¹¹⁾。子どもと谷のやりとりが明らかになるように、一部の表記を分かりやすく書き直した。

来月の仕事の相談

大村静子

3月13日の午後、図書館で来月の仕事の相談会が開かれた。皆、集まってまくならんだ。

谷先生 「来月、新しく始める協同の仕事について、何か考えついた人は言ってください。」

私 「驢馬に引かせる馬車を皆で作ろうか。」

正治さん 「馬車を作ろう。車は買ってこんならんなあ。」

誰かが 「驢馬にひかせるそりはどうや。」

又誰かが 「五六人乗れるのを。」

正美さん 「七面鳥の家と、運動場をこしらえてやるのは……………」

誰かが 「鶯の池も早う作りかえてやり度い。」

谷先生 「七面鳥の運動場は鶏のとなりに作ることにきまっているんだろ。鶯の池もかえるつもりで皆で肥だめを向こうへ移したんだから、お天気さえよくなればすぐかかれる。なるべく早く仕上げ度いが、少しは来月に仕事が残るかもしれんね。」

誰かが 「此の月中にやってしまおう。」

谷先生 「さあ、来月の新しい仕事は、馬車か、そりか」

野田さん 「そりなら僕一人でも作れる。」

正美さん 「もう今年は雪がそんなにも降らんで、馬車の方がええ。」

凌ちゃん 「四・五人乗れる位の馬車こしらえて、遠足の時小さい人を乗せてやろうか。」

元ちゃん 「代りばんこに乗り度いなあ。」

仲二さん 「馬車があったら、今までよりもっと遠い所まで行けるわ。」

谷先生 「おとぎの馬車にのって出かけるかな！」

五・六人 「おもしろいなあ！」

みんな馬車を作ることに賛成したような顔をした。

君ちゃん 「御幸山へ遠足に行った時、かえりに桐原で見たような温室が出来な

いかしら。」

谷先生 「あれはレンタン温室だったね。大きさはどれ位あったか。」

野田さん 「三間に一間半位や。」

正治さん 「お金が沢山いるぞ。」

直三さん 「鉄管がいるぞい。」

正美さん 「鉄管やら、ガラスやら、材木やら、トタンやら、セメントやらペンキやら、よしかずらやら寒暖計やら、それから水出すともせんならんなあ。」

野田さん 「何と何がいるか調べて、ほてから、どんだけお金がかかるか研究して見ることにしたら？」

誰か 「作る場所もきめんならん。」

正治さん 「畠か運動場にしたらよいさ。」

正美さん 「畠の中につくるのは畠がもったいないなあ。」

谷先生 「先づ、温室の図面と見積書とを此の中の誰かに作ってもらうことにしたらどうや。」

皆 「野田さんがよい。」

谷先生 「もう一人。」

誰か 「もう一人。」

2・3人 「正美君。」

谷先生 「そんなら野田君と正美君と二人で研究して見てくれんか。温室のある家へ行って、材料や組み立て方や材料の買い方そんなことを一々見たり、尋ねたりして研究してもらうことにしよう。フレームと小温室の作り方と言う本があったね。あれも参考にしたらよかろう。温室で作る植物の種類や、栽培法については君ちゃんや大村さんが主になって調べてもらいたいな。之には温室園芸の知識という本があるし、まだ他にも買う事にしよう。」

谷先生 「温室の方は、とにかく研究してもらってから、又相談して作れるものなら作ることにし度い。お金の問題もあるから五カ年けいかくになるとしても。先づ、此の四月に

は馬車の方に手をつけよう。」

野田さん「草具は買わんならんですやろな。」

谷先生 「そうやね、それから他にどんな材料があるかな。」

元ちゃん「車は二つでもよいで。」

誰か 「自転車の車の古いのでもよかる。」

又 誰か 「木材とペンキと鉄材等があるな、どうしても。」

谷先生 「どんな材料で、どんな形の馬車につくるかを四月までに皆それぞれ考えておくことにしようか。大きな点も、どんな色にぬるかも考えなければならない。みんなで、その場所の絵を書いて出してもらおうとしよう。」

こういう相談会があった。そして馬車はみんなが共同して作ることにきまった。その作り方については又四月のはじめに相談することになっている。

（『こまどり』第14号 1929年4月 労作号）

協議の前半は、昭和学園で飼育し始めた驢馬に曳かせる馬車づくりが提案されて、子どもの意見の大勢は、馬車づくりに傾きかけた。谷も子どもの意見の方向でアドバイスをを行い、途中で出た七面鳥の運動場づくりの声を斥けた。馬車づくりに傾きかけたところ、御幸山遠足の帰りに見た温室を作りたいという意見が出た。

子どもの議論は温室づくりの具体的な中身を検討することに移る。お金の問題、材料と作り方、温室の設計の仕方、作る場所など、自由で活発な意見交流が行われた。野田君から「何と何があるか調べて、ほてから、どんだけお金がかかるか研究して見ることにしたら？」という考えが出された。谷はこれを受けて、温室の図面と見積書の作成を子どもの代表にやってもらうことにしたらどうかと提案した。推薦された者の中から、野田清三郎君と竹田正美君を選んで、実際の温室のある家への調査と聞き取り、温室づくりの本を紹介した。大村静子さんと池野君子さんに温室で育てる作物や栽培法を本から調べるように指示している。ここでの谷のアドバイスはきわめて的確である。

そうしておいて、温室は研究しておくことに

し、相談の上作れるものなら作ることにしようとした。理由はお金の問題があるからであった。4月からは馬車づくりに手をつけることを明言し、3・4人に意見を言わせるが、ここでは谷はやや結論を急いでおり、4月までに各自の馬車づくりのイメージを絵に描いて出すように指示した。再度4月に相談会を開く事でこの日の会議を終えている。

3 昭和学園の労作内容と「総合的製作」の 労作教育実践

（1） 谷の労作教育の内容の分類

すでに述べてきたように、昭和学園の学習は、午前の教科の個別学習と、午後の労作の共同学習の2本立てであった。午後の労作は、子どもにより「働き」とか「仕事」とか呼ばれており、年齢による区分をせず、全員が仕事を分担して係ごとに課題となることを遂行していく学習である。年長の者が年少の者にさまざまな知恵と技術を教えている。

昭和学園での労作教育の類型として、谷は次のように分けて説明している¹²⁾。

① 園 芸

1933（昭和8）年末の時期で、昭和学園は面積2段以上の畠を作っていた。校地の一部、学園より西4キロの所に2カ所（松村畠、橋本畠と命名）の3カ所に花卉と蔬菜を栽培して、園芸活動を行った。他にも八幡町内の個人庭園（佐藤久治氏の花壇、佐藤保夫氏の庭、吉田悦蔵氏の花園）の庭園管理を請け負っていた。花卉では、カーネーション、スイートピー、菊、朝顔などを栽培して、八幡の品評会に持って行ったり、リヤカーや自転車に積んで町内に売りに出かけたりしている。

蔬菜では、ネギ、大根、日野菜、キュウリ、茄子、馬鈴薯、トウモロコシなどを栽培した。その中に、「山路畠」で栽培する夏作蔬菜があった。これは谷騰の滋賀県師範学校時代の恩師、山路一遊元校長から1931（昭和6）年に送られた種子を植え付けた畠であった。

② 動物飼育

谷は、動物飼育を「動物を愛することによって己の魂を育て、飼育を通して自己を練り上げ

る。学園の子供は豚も鶏も自分を教育して呉れる先生であるということを幾分認識している。」と述べている。谷は動物の飼育活動を通じて、小動物や哺乳動物の観察日記をつけさせ、子どもたちに動物との濃密な関わりを通じて生命の大事さを学ばせようとした。彼は、学園創立以来豚を2頭ずつ肥育しており、子豚が一度に12匹も一度の生まれたエピソードを紹介し、また白兎が35・6匹、名古屋コーチン50羽、十姉妹とセキセイインコの小鳥類が多数に、驢馬がいる時期があったと書いている。

しかし、動物飼育をただ観賞用や愛護のために飼育するためだけでなく、「年々生産される肉豚、鶏、兎等の販売は買集めに来る仲買人に売却する」ために行っている。そのため、1932～33（昭和7～8）年ごろになり、飼料が高騰しかつ肉や卵の売値が低落すると、「その飼育数を減らして」鶏や鶯、七面鳥、鳩、兎、豚を少数にしたとしている。

低学年の子どもの動物飼育の自由詩がある。
竹田敏男君と西川昌三君の詩である¹³⁾。

「ガテフ ノ ヒヨコ トシラ
ピイピイ / ガテフ ノ / ヒヨコ サ
ン、 / キイロイ / アカチャン /
カタマツテ / ハコ ノ 中 デ / オド
ツテル。」

「ロバ 昌三
ロバ ロバ / オナカ ガ スイタヤロ /
ナニ ガ ホシカ / ユウトクレ /
ナンノ 木ノ ハガ / オスキデスカ /
カシ ノ 木 ノ ハガ / オスキ ナ
ラ /
トテキテゲルデ / マツトイデ」

中西直三君の「山羊」の自由作文がある。

「山羊が子をうむので、めんの山羊の家にわらを入れて、あたたかくしてやった。そしてべつにおん山羊の家をみんなで作ってやった。

正美（竹田）君と正治（徳田）君と先生とが車をひいて、駐車場の近くまで材木を買いに行った。僕はそのあいだに、金物屋で二寸釘と波トタンを買って来た。

屋根にぬるペンキは馬小屋をつくる時に
つかった残りのペンキでまにあわせた。

僕は山羊の子がいつ生まれるかとしんばいしていたが11日の紀元節に生れた。

其の日は雪が降っていた。山羊の子はふるっていた。めん山羊が乳を子にのました。そのあくる日から歩けるようになった。5・6日たって、子山羊のからだをはかって見たら、身長が39センチ、からだのまわりが41センチ、かごに入れて体重をはかったら四千二百五十グラムあった。今ではぴょんぴょんと走ったり、はねとんだりして、なかなか元気である。（中略）

このごろは山羊にとって来てやる草がないので切りわらやふすまや、こめかをまぜて食べさせる。子山羊も少しづつその餌を食べている。時々、木の葉やささばをやるとよろこぶ。

乳はあまりたくさん出ないが、子供や病人がのむには牛乳よりも山羊の乳の方がよいと言うことである」

ここには、子山羊の生まれる前後の的確な観察のようすが描かれている。中西君は、親子の山羊のこまやかな愛情を発見しており、親山羊が赤ちゃん山羊に乳をやる姿を見て、ふるえていた子山羊が「そのあくる日から歩けるようになった」と思った。子山羊の体を図ってみたり、元気になった子山羊の跳んだりのはねたりのようすを見たり、さらに寒くなっていくので食べさせるものにも気を遣って、餌を工夫している。

③ 建築

谷の言う通常の建築の類型に入るものは、「積木、デルタ、ボール紙建築、小鳥の巣箱、兎の飼育箱、畜舎鶏舎」などである。動物小屋や物置小屋の全部を設計、建築、修繕などに取組ませている。いとも簡単に共同労作の対象であるとしているが、実際は子どもたちにとっては大変な労働作業であったと思われる。これら以上に、さらに大きな労働を行わせている。谷の実践論文には、昭和学園の子どもの寄宿舎づくりをみんなで手がけさせたと書いているのである。

その事情は次のようである。1931（昭和6）年4月に男児4人と、女兒3人が、「通学距離の関係上、学園に寄宿することになったが、家が狭くて寝る室が足りない。そこで其の年の3月相談の結果、別に小さい『子供の家』を1軒建てることになった。」砂防工事の監督事務所の小屋を払い下げてもらい、間口1間半、奥行1間半の四角いバラック小屋を建設した。学園の校舎前の物置小屋を移動させた跡地に、男子寄宿舎を建てて、1933（昭和8）年12月末段階で2人の子どもが泊まっているとしている。

④ 芸術的表現としての労作

谷は多くの事例をあげているが、実際の子どもの取り組んだものが書かれている部分を見てみよう。「濱子（西川）さんの肖像版画に楽焼壺、傳一（西川）君の静物パステル、元衛（小野）君の風景クロッキー（コンテ）に木彫人形、敏男（竹田）君、森谷（栄一）君の油絵風景、凌（小野）君の木工金工家具、野間（ママ田）（清三郎？）君のボール紙建築文化住宅、宏（谷口）君のスケッチ漫画、康（川上）ちゃんの手芸、各其の特有の天分を発揮し、作品が著しく傑出している。」

⑤ 科学的な製作製品

この科学的な製作製品づくりこそ、谷の最も得意とする分野であり、成城小学校での理科教師で活躍していた時代から、さらに発展させようとした領域であった。青写真に百色眼鏡、澱粉に、ソーダ水、インキにインキ消し、石鹼に、香水に、ベルツ水、水力タービンに、電磁石、電鈴に、望遠鏡、実物幻灯機に、模型飛行機、モーターボートに、電車模型、ラジオセットの組立てに、お菓子の製造。これらの事例をあげて、生活力旺盛な学園の子どもたちはもっと進んだ仕事をしているのだという。

このような科学的な製作製品づくりに取り組むなかで、子どもは「趣味的な観察、組織、工夫、判断、推理、綿密、技巧、自信、創造の力を啓発している」、そして「科学的なる製作製品の労作は、子供の自信を高めて発明発見の基礎を培う」のでであると述べた。

⑥ 総合的製作（後述）

⑦ 雑誌「こまどり」の出版

（2）「総合的製作」の労作教育の実践例

— 1929年の驢馬の「馬車づくり」—

谷は、「総合的製作」の労作教育について、「芸術と科学とが1つの仕事の中に融合調和されることはほとんど総ての労作に共通な事実である。」と述べ、芸術写真の撮影、建築の仕事、家具の製作などは「芸術と科学の総合的製作と見ることができる。」としている。すなわち、労作教育の相当に高いレベルの段階として「総合的製作」をとらえていたのである¹⁴⁾。

「馬車づくり」の過程

1 驢馬の購入

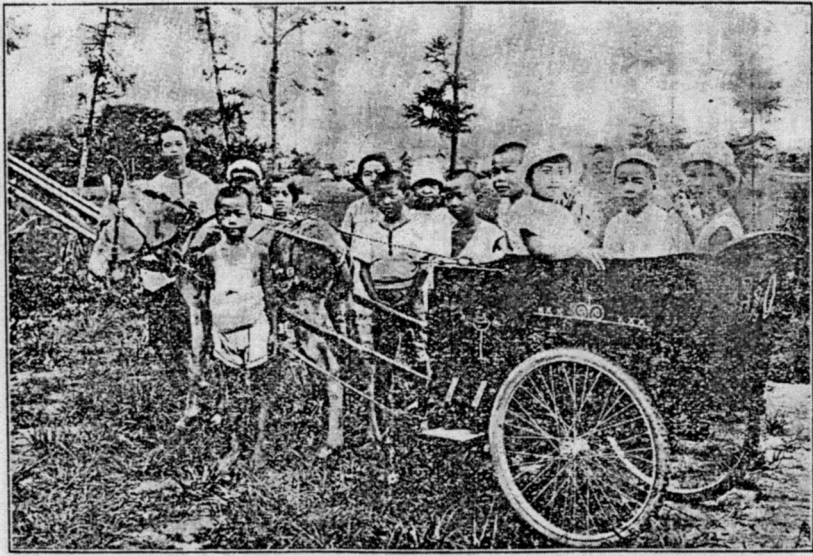
- ・豚を売ってまとまったお金が出来たので、新しい施設を考え、有効なお金の使い方を協議した。その結果、ある子どもの提案で驢馬を買う事にした。草津の獣医吉田さんに相談、宇治の花屋敷にいた驢馬が見つかった。竹田正美君が子どもの代表で吉田さんの家に見に行った。
- ・正美君の報告—霜降り毛のおとなしそうな質で、顔をなでて見たが噛みつかなかった、後ろに廻っても少しも蹴らなかった、背中に乗って草津の町を5・6町歩かせたが乗り手の思う方向に素直に方角を変えた。購入を決定、吉田さんに70円支払った。
- ・4・5日中に学園に来る事になり、馬小屋を急造することになった。

2 馬小屋の建築

- ・驢馬の体の大きさを考慮して、間口2メートル、奥行3メートル、棟梁の高さ3メートルの丸太柱の、掘立小屋波トタン寄せ棟、コンクリート床、総費用20円内外で作る事を決める。
- ・手工板の上に簡単に設計図を書く。運動場の一角の最も日当たりの良い場所を選んだ。「縄で地取りをして柱の穴を掘る者、手分けして丸太、貫、垂木、六分板、八分板、波トタン、釘、鋸（かすがい）、ペンキ、防腐剤、セメント等の材料を買集める者、集まった材料を設計図の寸法に随って切る者、桁、梁、束を鋸で留める者、貫を討つ者、屋根を葺く者、腰板を打つ者と言った姿に共同して、其の日の中に家の恰好だけ

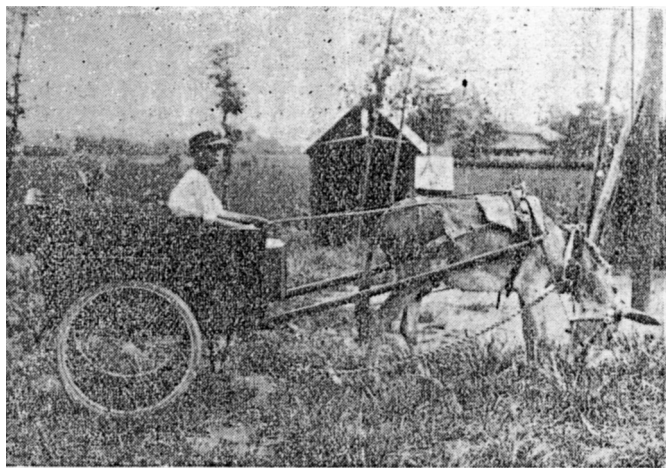
明説眞寫

宮眞は昭和學園のお馬車です。此の學園は八幡在土田に建つてゐる縣下唯一の私立小學校で、その學童達が園長谷騰氏の指導のもとに拵へあげたのが此の馬車です。工費凡そ三十圓、可愛い驢馬が曳いて居ります。馬車の周圍に居るのは學園の全生徒さんです。



□ 車 馬 お の 園 學 和 昭 □

（『太湖』第43号 1929年8月9日）



（作製同共）車 馬

（『近江教育』第459号 1934年2月）

は出来上がった。其の翌日は寄せ棟妻部の仕上げ、屋根のペンキ塗り、窓の仕上げ、鎧（あぶみ）張壁板の防腐剤塗り、床のコンクリート、其他小屋の背後に肥溜を作ったりした。」その他の所にも、半日を要した。

3 愛育と乗馬

- 吉田獣医より、飼料を教えてもらう。切りわらをお湯に浸し、これに米ぬかと麩（ふすま）と豆腐かすを加えたものを1日2食、他に大豆や大麦。1日1回は必ず運動させること、この時に子どもたちは交代で乗馬の練習をした。乗馬用の鞍は中古の出物を買った。
- 「日曜日には村の子どもたちにも希望者には乗せてやった。月に一度づつ（ママずつ）1里程ある上田まで1人の子どもが驢馬を連れて蹄鉄を打替えに行った。」
- 谷口宏君の「ロバ」の詩

「マイアサ ボク ガ/ウマ ヲ ア
ケ ニ イク ト/
ナガイ オミミ ヲ/ウゴカシ テ/
チッパ チッパ ト/ナイテ キル/
タベモン クレ ト/ナイテ キル」

4 馬車づくりの相談

- 馬車の共同製作を決定し、各児が理想とする馬車の画を描いて持ち寄った。検討の上、子供の中から3名の委員をあげ、綿密な設計図を作らせた上で、又協議することとした。

5 製図委員の苦心

- 製図委員は木工、金工の書物を読んだり、自転車屋に行き研究したりした。ボール紙で模型を作ったりもした。幾度か訂正して、車の組立図、平面図、正面図、見取り図などのエッチング原画を描き上げ、この設計図を青写真にとる準備を進めた。
- ① 原画を透明な硫酸紙に墨汁で引写す仕事、② 写真の焼枠の製作に手をつけた、③ 青写真の感光紙を作る化学的作業、④ 日光の直射する場所に出る焼付け作業。こうして1組5枚よりなる場所の設計図を青写真に複写、数組作った。

6 設計図による工作

- 毎日1～2人づつ（ママずつ）作業室に残って設計図の寸法に随い、部分品の工作に従事。日曜日に谷とともに鍛冶屋に出かけ、部分品の工作を行う。
- 「先づ箱の部と車体との二つに仕上げ、次に箱の部を車に乗せて丈夫なボルトで留め、其後に驢馬との連絡部を取付けて、場所の組立は全部完了した。」
- ペンキ塗りは3回の塗りで、緑の田園に行く馬車を考え、小豆色に塗られ、その上にクリームに近い色の細い線模様で単調を破った。
- 背面に図案化した「昭和」の2字を大きく浮き出させ、正面にエスペラントの「教育第一」のアルファベット文字を入れた。凡そ2ヶ月かかって完成。

7 馬具の注文

- 馬車の腕木を取付ける鞍を注文するため、驢馬の身体検査をする。肩鞍、背鞍、手綱などの革具を京都へ行って注文、半月後に届く。

8 馬車の利用

- 「馬車は子どもで馭者ともに6人乗れる。ゴム輪の2輪車なるが故に頗る軽い」
- 「放課後の郊外散歩に馭者の練習して、子供たちが互に乗り廻る他に、幼稚園の子供が来た時に7・8人づつ交り番こに乗せてやったり、学園のお客様を八幡駅まで出迎えに行ったり、油粕やパルプや飼料を買い入れる日はトラックの代りをした。遠足の日、小さい数人だけは片道馬車に乗らせて比較的遠距離の土地まで出かけることも出来た。夏のキャンプにもこの馬車を利用して荷物を運ばせたり、一部の子供が乗ったりして、いつも愉快に出かけたものである。」

（3）『こまどり』に見る驢馬の「馬車づくり」の労作体験の記録

1929（昭和4）年に発行された『こまどり』の各号の記事や編集後記から、驢馬の馬車づくりの労作記録を復元することができる。第13号（1929年2月）には、驢馬の購入が決まっ

ていて、小屋づくりも行われていた。この号には2人の驢馬の詩が童謡として載っており、上にあげた谷口宏君の詩と西川昌三君の詩である。編集後記に池野君子が「菜の花咲いた傳歩の道を驢馬に乗って歌いながら行く日のくるのもそう遠くないでしょう」と書いている（2月20日付け）。

3月13日の図書館での労作作業の相談会で驢馬の馬車づくりを決定して、4月の相談会までに分担して設計図を仕上げていくことになった。第15号（4月）には、速水栄一郎君が夏になったら、山や海に出かけられるからうれしいと書き、「僕の一番好きなキャンピング」の時に、「驢馬につけて、お米やら、おいもやら色々なべものを持って、みんなが行くことになったら、どんなにうれしいでしょう」と期待している。編集後記に「馬車の設計—馬車の図面が出来たのもう馬車を、こしらえるのに、とりかかって居ります」との報告を知らせている。この時、「山下先生からのおたより」があって、ロシヤとドイツから帰国の山下先生からのお手紙が届き、5月か6月にお出でになって話をしてくれる予定という予告をしている。山下先生とは、谷の成城小学校時代の同僚だった山下徳治のことであり、彼は谷の昭和学園に再三訪れていたのである。

第16号（5月）の「お話号」は、12名の子どもが創作童話を書いて発表している。谷が「作者の個性によってそれぞれ特色があって面白いね。みんななかなかうまいもんだ」と批評して喜んだと記されている。編集後記には5月の労作活動の記録が掲げられているが、25日に「おとぎの馬車が全部出来上がりました」と書いている。

第17号は夏のキャンプ号の特集で労作関係の記事は出ずに、第18号（10月）に、驢馬の馬車に関する4人の子どもの作文が登場している。徳田正治君の「ろばのお話」、西川仲二君の「をか山えんそくのこと」、速水栄一郎君の「岡山に行ったこと」、徳田正治君の「手紙」、谷口宏君の「ささきじんじゃ」の5編である。子どもたちの労作共同学習の結果が、どのように学ばれていて、子どもの生活に生かされているかを見る上で興味深い資料なので、労をいと

わず引用しておきたい。

『こまどり』第18号の巻頭に、谷騰の短文が寄せられている。「自然をありのままに見る目は、やがて自分の心をすなほに見る目となるのだよ。」と書き、次いで子どもたちの秋にちなむ作文や詩が6編発表され、その後に徳田正治君の作文が掲載されている。以下の作文の引用は原文のままにするので、分かち書きで読みづらいかもしれない¹⁵⁾。

ろ馬 の お話

正治（徳田正治）

学園のろ馬はある日馬車をひいて
たんぼ道を散歩してゐました。
するといなごが「今日は散歩かね」といひました。
「いなご君今日はあついね。君は
毎日稲ばかり食べてあそんでいる
ではないか。僕は毎日学園で働らいて
るよ。君もすこし働らきたまへ」
と言ひました。

8月17日の学園のすぐ近くの岡山への遠足に、驢馬の馬車に乗って行った経験を作文に書いたのは、西川仲二君と速水君である。西川の文中のもくちゃんは谷の4才の息子黙也のことである。岡山でメダカつかみしたり、ボートに乗った体験が語られている。速水君の文は、23日の遠足のことで、米を1合づつ持って6時に出発して、驢馬の馬車に荷物を積んで出かけている。琵琶湖で水遊びしたり、泳いだりした後に、飯ごう炊さんをして昼食を食べ、午後にもた水泳やボート乗りで遊んでいる。

をか山へえんそく

仲二（西川仲二）

八月十七日はをか山へ行きました。
昌三さんと私ともくちゃんは馬車に
のって行きました。私はかへりも、もく
ちゃんとのりました。かへりのとちゅう
で大きな馬がきましたのでのきました。
むかふではめたかをつかみました。
すなのところへあなをほって、め
だかをいれました。又ボートにのって、

ずっと沖の方へ行きました。大へんよいけしきでした。

岡山へ行ったこと

はやみ (速水栄一郎)

二十三日の日、岡山へ遠足に行きました。

米を一合づつ持ってあつまり、朝六時にしゅっぱつしました。ろばに馬車をつけて馬車の中に荷物をつんで、七ちゃんとむようちゃんと正美君と僕とは馬車をつれて先にいきました。

加茂をとほってずんずん行くと、やうやく岡山のお宮へつきました。馬車をお宮へおいて、馬だけつれてみんないっしょに又あるきました。

たんぼのほそ道をいくうちにもう湖水がみえて来たのでずんずんあるいてとうとうつきました。

もうとしちゃんと中西君がユニホームとパンツになっておよいでゐます。僕も水の中にはいってさかなをとってあそびました。

そのうちにごはんをたくことになりましたので僕は七ちゃんと中西君と三人のくみになって松林の方でごはんをたきました。

しばをあつめたり、松かさひろったりしてたきますと、ふいて来たのですぐ上げてしばらくしてからたべました。おかづはなすびとしちみのみそ汁のほかにかつをのでんぶやならづけを女の人がよそってくばりました。はんごのごはんをたべてから又はだかになって水の中にはいりました。そして二三人がボートをかりにいて来て、みんながかはるがはる乗って遊びました。

そのうちに三時ごろやから、かへるかといひました。のでボートをかへしに行つてそれからしたくをしてかへりました。(をはり)

徳田正治君の作文「手紙」は、山下徳治との手紙のやりとりを書いたもので、「手紙1」では高学年らしくしっかりと驢馬の購入から、馬車作りの経緯を説明しており、「手紙2」に山下からの返事を引用している。昭和学園には東京の成城時代の関係者として、山下徳治をはじめ、沢柳政太郎、教育学者の小西重直、長田新らが訪れている。専門家による実地指導として招かれ、『こまどり』に学園の感想や批評を寄せた人も多い。画家の小出檜重、彫刻家の森谷、陶工の与吉の各氏らである。ここでの徳田君の作文の引用は、わかりやすく改める。

「手紙1」

「山下先生、東京も暑いでせう。おかはりございませんか。僕たちは、丈夫で勉強してゐます。こちらでは雨がふりませんので、百姓さんが困って居ります。僕たちも、毎日畠に水をかけてゐます。おなす、きゅうり、とまと、ひょうたんなど、たくさん出来て居ります。豚を売って、馬車挽具を谷先生と二人で、京都まで買ひに行きました。

馬車は六人乗りです。大人でも二人位は乗れます。ぎょしゃは、速水君が一番上手ですが、誰にでも出来ます。谷先生も馬車を作る時は、大分苦心して手傳つて下さいました。

日曜には出町のかぢやさんで働いて、いっしょうけんめいにならうてきたりしました。学園でも馬車のしゃしんをとりましたが、小さいですから、しゃしんやさんにとつてもろたのを一枚お送りします。

八月一日から、今年も岩根へキャンピングに行きます。先生は東京でごべんきょうですか、又八幡へ来て下さい。馬車でえきまでおむかひに行きます。

七月三十日

徳田正治

山下徳治先生」

「手紙2」

「とても親切な御便り有難う。皆様のただ面白いか、楽しさうだとか言ふだけでなく、生きてきびきびして、そして育つて行く学園の生活がうかがはれて、大変愉快でした。ほんとに有難う。そして今頃は又、岩根山にキャンピン

グ生活、こうして昭和学園の仕事が一年一年積み上げられて行く。外の皆様にも、どうぞ宜敷く御傳へ下さい。谷先生へも。

山下徳治

徳田正治様」

9月24日には、安土の沙沙木神社へ遠足に行った。谷口宏君の「ささきじんじゃ」は、この遠足に行くときに驢馬の馬車に乗って行った情景を書いたものである。この時も昼食は飯ごう炊さんを行い、帰りに河村豊吉校長の金田小学校に立ち寄っている。このように「馬車づくり」の労作学習で共同作業で作った馬車を、当初の目的どおりにこれに乗って驢馬にひいてもらい、学園の近郊に出かけて楽しんでいのである。作業がたんなる技能・技法の習得や習熟ではなく、また精神主義的な体験至上主義に陥らず、生活を楽しむための労作体験であったことが、子どもの作文から立証できる。分かち書きを改めて引用する。

ささきじんじゃ

宏（谷口宏）

九月二十四日に、ささきじんじゃへえんそくにいきました。みんなが、九じにしゅつぱしました。やっちゃんだけは、やすみました。一ばんはじめ、もくちゃんと仲二さんと昌三さんとが、ばしゃにのりました。ささきじんじゃにつくと、おやしろをおがんでから、みんながあそびました。のぎたいしょうのうゑた松の木が、ありました。すこしあそんでから、はんごにおこめをいれて、たいてたべました。おんなの人は、べんとうでしたが、のこったはんごのごはんもたべました。はんごや、やくわんをばしゃの中に入れてから、又あそびました。かへりにも仲二さんともくちゃんが、のっていきました。かねだのがくかうでお茶をのんで、またばしゃでいきました。えきみちで仲二さんと昌三さんとが、おりました。ぼくととしちゃんとがのりました。かへってすぐ、ばしゃやのどうぐをしまひました。そして、ろばをつなぎました。

小 括

本稿では、谷の昭和学園の教育信条を考察して、その理想をもっとも現実化した労作教育の実践について、1929（昭和4）年度に取り組まれた労作教育の実践事例「驢馬の馬車づくり」を概観してきた。昭和学園の文集『こまどり』は、谷騰の実践記録のなかでしばしば引用されており、未発見の谷の「学校日誌」とともに、昭和学園の教育実践をとらえる上でもっとも重要な資料である。ここでは、谷の労作教育の中でも「総合的制作」活動の労作教育の内容を検討したが、これは彼の最も理想とする労作教育であると考えたからである。

子ども自身の編集・企画・運営になる『こまどり』は、多くの子どもたちの素直で伸びやかな作文や詩を読み取ることができる。子どもの側の労作教育実践のとらえ方を『こまどり』のわずかな断片的記録から読み取ろうとしたが、資料的制約があり十分でなかったかもしれない。次回には、昭和学園の教育実践のもう一つの柱——協同自治生活の実践——について、『こまどり』を中心に分析を進めていきたい。

注

- 1) 拙稿「昭和学園における谷騰の教育実践（Ⅰ）——成城小学校時代の理科教育の実践」（『滋賀大学教育学部紀要Ⅰ 教育科学』第54号 2004年）2005年3月
- 2) 拙稿「昭和学園における谷騰の教育実践（Ⅱ）——ドルトン・プランと昭和学園の教育」（『滋賀大学教育学部紀要Ⅰ 教育科学』第55号 2005年）2006年3月
- 3) 谷騰「昭和学園の教育概観」（『近江教育』第458号 1934年1月号）132-134頁
- 4) 同上『同上書』（玉川大学小学部編『教育日本』第79号 1937年）
- 5) 園田千代恵『滋賀県における「新教育」運動の研究——谷騰と昭和学園を中心に——』（1993年2月 大阪大学文学部日本文学文化系 卒業論文）
- 6) 西川吉之助「谷騰先生」『太湖』第11号（1926年12月9日）4頁。西川は、小原国芳と会って谷騰を推薦してもらった事情や、小西重直と沢柳政太郎からも谷のすぐれた人格や教育実践家の力量を保証されたことを書き、開設したばかりの昭和学園で谷の指導ぶりを

紹介している。この文中で沢柳の西川宛私信「始めて八幡町へ参り谷氏の学校とヴォーリス氏の事業を一覧候（中略）谷氏も実に献身的に従事致居候何卒御後援の程切望に不堪候」と昭和学園を訪問したことを紹介し、支援を要望した。

- 7) 「学報 昭和学園設立趣意」『太湖』第26号（1928年3月9日）3頁。募集要項の最初に、「其の綱領」として第1から第10までの10カ条の綱領を掲げている。
- 8) 西川吉之助「はま子の女学校入学」『口話式龔教育』第4巻第4号 1928（昭和3）年4月17～20頁
- 9) 谷騰「昭和学園の教育概観（続）」（『近江教育』第459号 1934年2月号）46頁
- 10) 池野北堂編著『教育に親しむ人々（その二）』

（江州公論社 1934年）他の教育関係の出版物を発行し、滋賀県教育界において在野の教育ジャーナリストとして活躍する。近江八幡を拠点にして1935（昭和10）年7月に『教育陣営』を創刊、主筆として健筆をふるう。昭和学園の地元の教育関係の支援者として、金田小学校長であった河村豊吉とともに、谷騰を支えた。

- 11) 谷騰「前掲論文」（『近江教育』第459号）注9）46頁
- 12) 谷騰「同上論文」注9）27～48頁
- 13) 竹田敏男君と西川昌三君の詩は、『こまどり』第13号（1929年）からの引用と推測される。
- 14) 谷騰「前掲論文」注9）42～45頁
- 15) 『こまどり』第18号 1929年10月